

史跡 齋宮跡

平成 28 年度発掘調査概報

2018年3月

齋宮歴史博物館



第 189 次調査区全景（東から）

序

平成29年度の三重県は、4月からお伊勢さん菓子博の開催にはじまり、観光客を中心に南勢地域の注目度が高まりました。そして、平成30年度に開催される、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の開催に向けて、齋宮歴史博物館でも、唯一無二の遺跡である齋宮を知るサイトミュージアムとして、その魅力を全国に発信しております。

今後、齋宮歴史博物館、さいくう平安の杜、いつきのみや歴史体験館、いつきのみや地域交流センターなどと合わせて、訪れるすべての方に、史跡齋宮跡の歴史と文化を体験、体感していただける場所として、末永く活用していただくことを切に希望します。

さて、今回報告する発掘調査は、史跡の実態を解明するため、史跡西部の中垣内地区で行ったものです。奈良時代にさかのぼる齋宮の中樞を囲む掘立柱塀や飛鳥時代の齋宮の造成にかかわるとみられる竪穴建物など、飛鳥から奈良時代の齋宮を解明するには欠かせない手がかりを得ました。この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2018(平成30)年3月

齋宮歴史博物館

館長 明石典男

例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成28年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第189次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 三重県が内閣府の地方創生加速化交付金の交付を受けて実施した、発掘調査（第188次調査）の概要報告は別途刊行する予定である。
- 3 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第187次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 4 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。
- 5 遺構時期区分の指標となる土器の分類と年代観については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館、2001年）、大川勝宏2010「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要十九』斎宮歴史博物館、大川勝宏2005「平安時代後期の斎宮跡」『明和町史 斎宮編』明和町による。
- 6 斎宮跡の時期区分については土器の編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記すべきであるが、本文中ではこれを簡略に「斎宮Ⅱ-1期」等と表現している。
- 7 遺構表示記号は次のとおりである。
S A：柱列・堀 S B：掘立柱建物 S H：竪穴建物 S D：溝 S K：土坑 Pit：柱穴、ピット
- 8 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っているが、一部の遺物は3分の2で掲載している。遺物写真は縮尺不同である。
- 9 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第5版（1989年）を用いて補っている。
- 10 遺物の漢字表現は、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いる。ただし、参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。
- 11 本書の執筆・遺物写真の撮影は、宮原佑治があたり、編集は調査研究課で行った。また発掘調査および資料整理については、大川勝宏・穂積裕昌・川部浩司・八木光代・西川千晶・森本周子が補佐した。

目次

I 前言	1
II 第189次調査	7

挿図目次

第I-1図	史跡斎宮跡位置図	3
第I-2図	平成28年度発掘調査区位置図	4
第I-3図	斎宮跡方格地割区画名称図	5
第I-4図	史跡斎宮跡における大地区表示図	6
第II-1図	第189次調査 グリッド図	7
第II-2図	第189次調査 調査区位置図	8
第II-3図	第189次調査 遺構平面図	9
第II-4図	第189次調査 土層断面図	10
第II-5図	第189次調査 SK11011出土状況図・土層断面図	11
第II-6図	第189次調査 SA9472土層断面図	12
第II-7図	第189次調査 SA11016・11017土層断面図	13
第II-8図	第189次調査 出土遺物実測図1	15
第II-9図	第189次調査 出土遺物実測図2	17
第II-10図	中垣内地区における調査と遺構配置図	21
第II-11図	中垣内地区における奈良時代の区画配置推定図	22

写真図版目次

巻頭図版	第189次調査区全景（東から）	
写真図版 1	調査区全景（東から）／調査区全景（西から）	23
写真図版 2	S K11011全景（南東から）／S K11011内ピット出土状況（東から）	24
写真図版 3	S H11014全景（北西から）／S H11013全景（南東から）	25
写真図版 4	S A9472（北西から）／S A9472南北列（北から） S A9472東西列（東から）	26
写真図版 5	S A9472柱穴 1 土層断面（南東から）／S A9472柱穴 3 土層断面（南東から） S A9472柱穴 3 土層断面（北西から）／S A9472柱穴 5 土層断面（北東から） S A11016（北から）／S A11016柱穴 5・6 土層断面（西から） S A11016柱穴 7 土層断面（西から）	27
写真図版 6	出土遺物（1）	28
写真図版 7	出土遺物（2）	29

表目次

第 I - 1 表	平成28年度発掘調査一覧表	2
第 II - 1 表	第189次調査 掘立柱建物一覧表	14
第 II - 2 表	第189次調査 遺構一覧表	14
第 II - 3 表	第189次調査 遺物観察表（1）	19
第 II - 4 表	第189次調査 遺物観察表（2）	20
第 II - 5 表	第189次調査 遺物観察表（3）	21

I 前 言

1 調査の経緯と概要

史跡齋宮跡は、後に齋宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い、昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した齋宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

齋宮跡の発掘調査では、史跡東部に所在する方格地割と、平安時代や鎌倉時代の齋宮跡中枢部の具体的な解明に加えて、史跡西部に展開すると想定される飛鳥・奈良時代の齋宮跡の解明も重要な課題である。

明和町では「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取り組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画では、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画しており、それに先立って発掘調査を下園東区画において平成24年度に行い、平成27年度から工事に着手、平成29年3月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。さらに、平成27年4月24日には「祈る皇女齋王のみやこ齋宮」として日本遺産に認定されている。

発掘調査

史跡西部の飛鳥・奈良時代にかけての齋宮の構造解明は齋宮跡発掘調査における重要課題の一つである。齋宮跡解明の端緒となる大型朱彩土馬や蹄脚硯が出土した古里地区からその南側の中垣内地区にかけては、古代伊勢道と枝分かれする南北の道路を中心に、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物と竪穴建物が多数確認されており、当該期の官衙施設が展開すると推測される。また中垣内地区では、台地の南西縁辺部に飛鳥・奈良時代の柵あるいは掘立柱塀からなる区画が確認されており、当該期の中核施設が展開す

ることが推測されている。しかし、その具体的な規模や構造については、まだ解明されておらず、さらには区画と建物群、道路などの付属遺構との関係性についてもわかっていない。これらは飛鳥・奈良時代の齋宮を解明するうえでの喫緊の課題である。

上記の課題を受け、中垣内地区の実態解明を目的として、平成28年度は第189次調査を実施した。調査面積は127㎡で、調査期間は平成28年12月17日～平成29年3月24日であった。

発掘調査現場の公開・活用

齋宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な利活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や夏休み体験発掘ウィーク、大人の1日体験発掘講座、学校団体等の体験発掘を開催している。その他にも県内大学との連携を行い、発掘調査アシスタントの受け入れを行っている。

平成28年度第189次調査の随時公開・説明の参加者は250人、平成29年2月25日に開催した現地説明会の参加者は209名であった。大学の発掘調査アシスタントは、三重大学、皇學館大学の学部生および大学院生が参加した。

2 調査体制

史跡齋宮跡の調査・整備に関する業務は、齋宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

<第189次調査>

- ・平成28年度
大川勝宏（課長）
穂積裕昌（主幹（課長代理））
伊藤文彦（主査）
宮原佑治（主任）
- ・平成29年度
大川勝宏（課長）
穂積裕昌（主幹（課長代理））
川部浩司（主査）

宮原佑治（主任）

3 齋宮跡調査研究指導委員会

齋宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成29年3月15日の1回、委員会を開催し、第189次調査を含む中垣内地区の性格や明和町の整備事業について指導や助言を得た。指導委員の方々は下記のとおりである。

〔指導委員〕

浅野 聡（三重大学大学院准教授）

稲葉信子（筑波大学大学院教授）

小澤 毅（三重大学文学部教授）

金田章裕（京都大学名誉教授）

黒田龍二（神戸大学大学院教授）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

増渕 徹（京都橋大学教授）

松村恵司（奈良文化財研究所長）

本橋裕美（愛知県立大学准教授）

渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）

綿貫友子（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

4 発掘調査基本方針の策定

史跡齋宮跡東部整備事業の完了を受け、今後の齋宮跡の発掘調査のための「史跡齋宮跡発掘調査基本方針」を調査研究指導委員会の部会での作業をもとに策定した。

齋宮跡の変遷を知る上で、3箇所为重点的調査地域を定め、効率的な実態解明をめざすとともに、発掘現場の積極的な公開活用を基本的な方針としている。

調査回数	地区	面積 (㎡)	調査期間	位置	土地所有者	現状変更	保存地区 区分
188	K9	700.0	H28. 5. 23～12. 16	明和町齋宮字広頭	明和町	計画発掘調査	1
189	G10	127.0	H28. 12. 17～H29. 3. 24	明和町大字竹川字中垣内	個人	計画発掘調査	1
187-1	P7	53.0	H28. 5. 13～5. 31	明和町大字齋宮字楽殿	個人	住宅建築	3
187-2	I13	2.1	H28. 5. 16	明和町大字竹川字東裏	個人	住宅建築	4
187-3	J9	2.2	H28. 6. 15	明和町大字竹川字東裏	明和町	史跡整備	1
187-4	Q9	80.4	H28. 6. 27～7. 1	明和町大字齋宮字下園	明和町	史跡整備	1
187-5	K6	2.1	H28. 7. 19	明和町大字齋宮字塚山	個人	浄化槽埋設	3
187-6	S8	170.8	H28. 8. 4～9. 16	明和町大字齋宮字西前沖	個人	住宅増築	2
187-7	M7, O7	71.0	H28. 8. 29～10. 6	明和町大字齋宮字篠林	明和町	史跡整備	3
187-8	H12	2.6	H28. 6. 29	明和町大字竹川字東裏	個人	浄化槽埋設	4
187-9	U13	19.4	H28. 10. 6～10. 11	明和町大字齋宮字笛川	個人	住宅建築	4
187-10	R12	3.6	H28. 10. 11	明和町大字齋宮字牛葉	明和町	道路標識建替	3
187-11	Q9, R9	7.1	H28. 10. 21～11. 7	明和町大字齋宮字下園	明和町	史跡整備	1
187-12	Q13	280.0	H29. 1. 11～3. 24	明和町大字齋宮字鈴池	個人	住宅建築	3
187-13	O8, P10	13.3	H29. 1. 25～1. 27	明和町大字齋宮字篠林ほか	明和町	電線埋設	1
187-14	I13	2.9	H29. 2. 7	明和町大字竹川字南裏	個人	住宅建築	4
187-15	I11	4.6	H29. 2. 27～2. 28	明和町大字竹川字中垣内	三重県	側溝付替等	3
187-16	P13	30.4	H29. 3. 22～3. 24	明和町大字齋宮字牛葉	個人	住宅建築	4
187-17	S7	6.4	H29. 3. 28～3. 31	明和町大字齋宮字西前沖	明和町	下水道埋設	3

第I-1表 平成28年度発掘調査一覧表



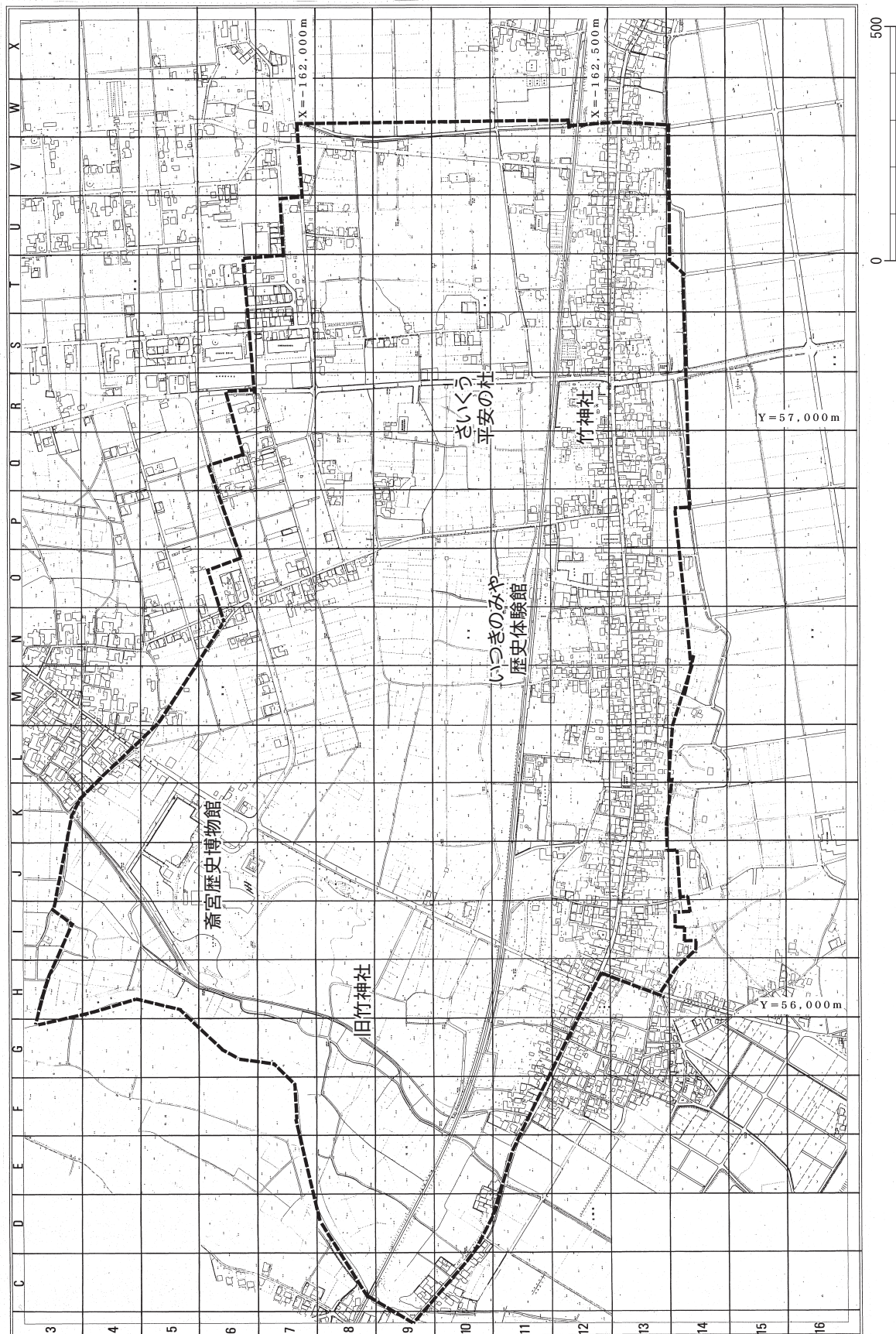
第 I - 1 図 史跡斎宮跡位置図 (1 : 50,000 · 国土地理院 1/25,000「松阪」「明野」を改変)



第 I - 2 図 平成 28 年度発掘調査位置図 (1:10,000)



第 I - 3 図 齋宮跡方格地割区画名称図 (1:5,000)



第 I - 4 図 史跡斎宮跡における大地区表示図 (2002 年)

Ⅱ 第 189 次調査

(6 A G 1 0 中垣内地区)

1 はじめに

第 189 次調査区は、史跡西部の中垣内地区でも近鉄線路の北側に位置し、付近では第 16 - 4 次・16 - 5 次・16 - 6 次・58 - 4 次・81 - 7 次・85 - 8 次・100 次・144 次・146 次・182 - 1 次調査などが行われており、これまで「初期斎宮」と呼ばれてきた飛鳥・奈良時代を中心とした堀や柵、掘立柱建物、竪穴建物、土坑、溝などが確認されている。

特に近鉄線路以南の第 58 - 4 次・146 次・182 - 1 次調査で確認されている正方位の方形区画をつくとみられる掘立柱堀 (S A 9472) は、聖武天皇の娘である井上内親王の群行と合わせて整備された可能性も指摘されている⁽¹⁾。S A 9472 は、奈良時代の斎宮の中樞を圍繞するに相応しい、一辺 1 m を超えるような柱掘形で、柱間も約 2.4 m と奈良時代では大型である。ただし、この S A 9472 が区画する方形区画の平面規模については、南東隅部および西端部と推測される柱列の一部を確認しているものの、具体的には言及できていなかった。

また近鉄線路以北における第 100 次・144 次調査で確認された東西に 40 m 以上延びる掘立柱堀 S A 9093・9094 は、柱掘形規模こそ 0.6 m と S A 9472 に比して小さいが、柱間は 2.4 m で共通する。このことから、S A 9093・9094 も S A 9472 と同様に方形に掘立柱堀が圍繞する区画となる可能性が考えられる。

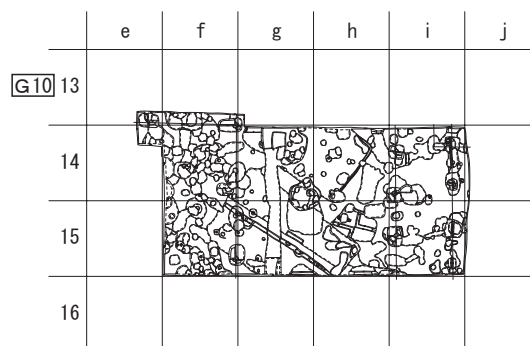
第 189 次調査区は、S A 9472 が近鉄線路以北まで延伸していた場合、北東隅部が位置する可能性のある場所、および S A 9093・9094 が方形区画を構成すると想定した場合の南北柱列を検出することを目的として調査区を設定した。なお第 189 次調査の調査面積は 127 m²、調査期間は平成 28 年 12 月 17 日～平成 29 年 3 月 24 日であった。

- (1) 水橋公恵 2007 「建物・堀の方位からみた奈良時代初期斎宮の変革 - 掘立柱堀 SA9472 の年代的位置づけを中心に -」『斎宮歴史博物館 研究紀要』十六 斎宮歴史博物館

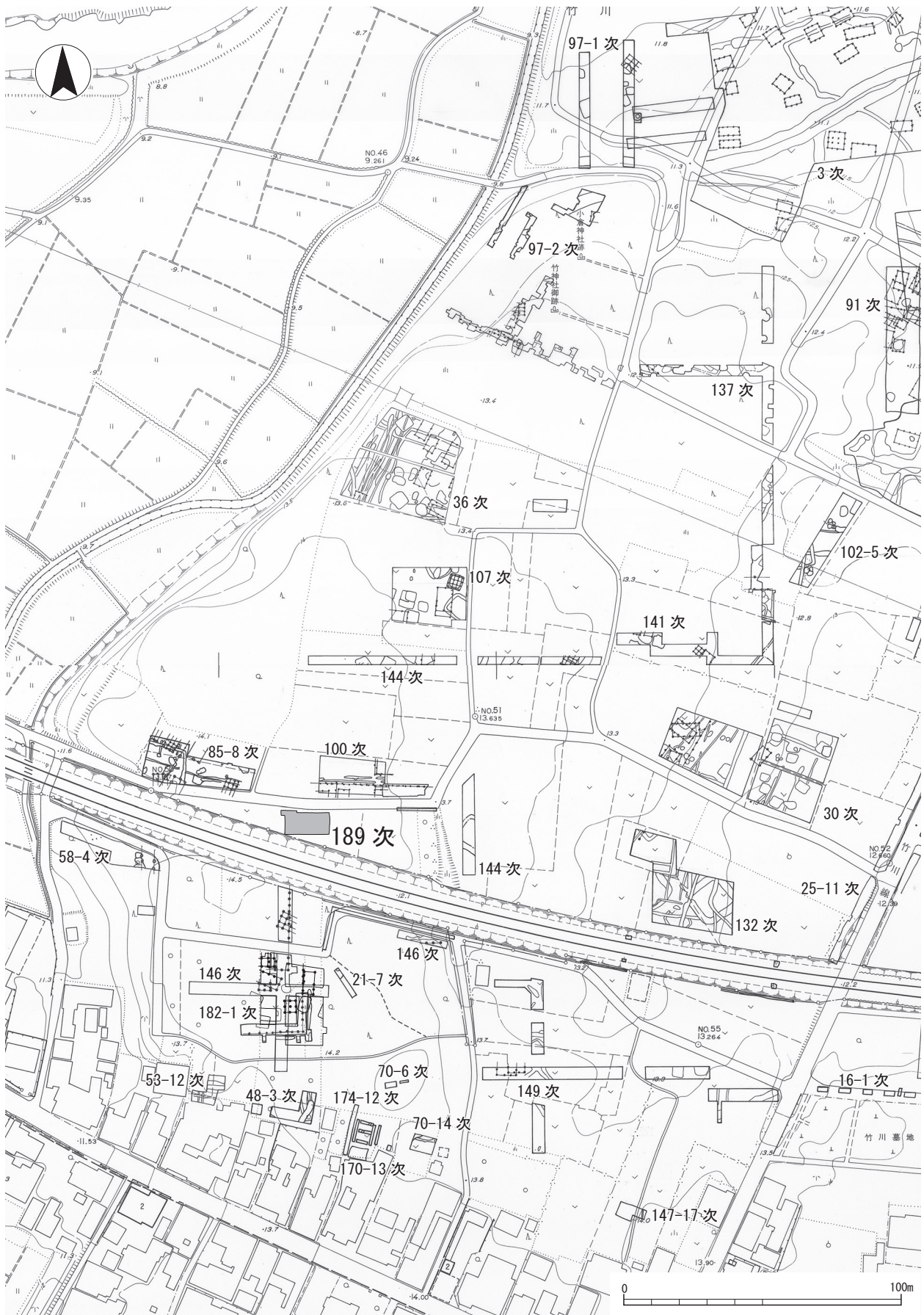
2 地形と層位

調査区は現況が畑地の平坦面で、旧来の櫛田川の河道である祓川沖積平野からは、3～4 m の高低差のある段丘崖を登った明野原台地の西端の標高約 14 m 地点である。明野原台地は西から北東方向にむけて緩やかに傾斜するものの、台地上は概ね平坦面を形成している。しかし台地西端部は、旧河道に沿って周囲よりもやや高く、西側の段丘崖下だけでなく、北東部の緩傾斜地も見下せる立地となる。

基本層序は、表土 (耕作土)、包含層 1 (平安時代以降)、包含層 2 (飛鳥～平安時代)、包含層 3 (弥生時代)、地山からなり、地山面までの深さは西端で 0.6 m、東端で 0.55 m ある。遺構の検出は、本来であれば包含層 1・2・3 の面で行う必要があるものの、検出面の土色と遺構内埋土の土色が同系色となり遺構の認識が極めて困難となるため、遺構の認識が可能となる地山面で行った。



第Ⅱ-1図 第 189 次調査 グリッド図 (1 : 400)

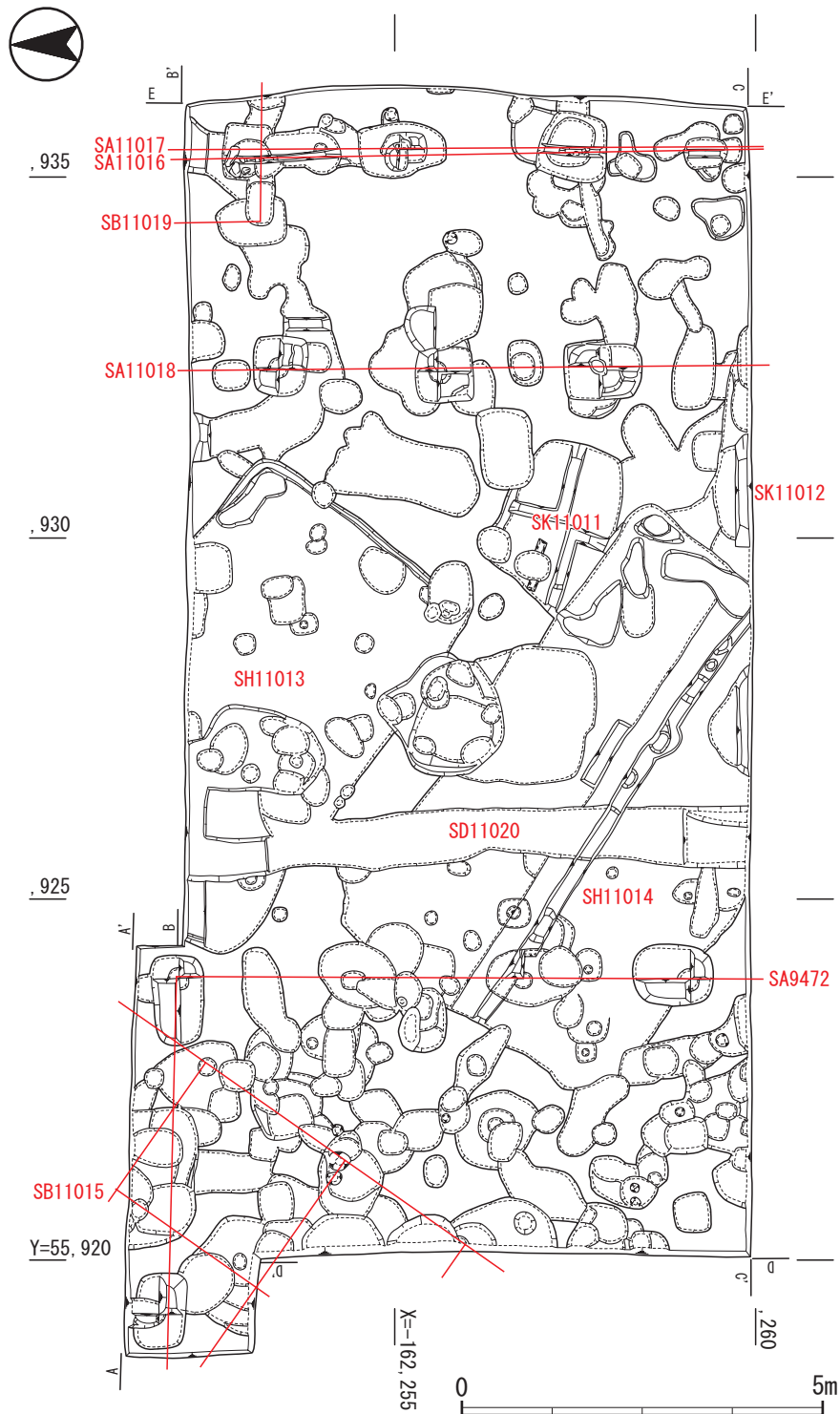


第Ⅱ-2図 第189次調査 調査区位置図 (1:2,000)

3 遺構

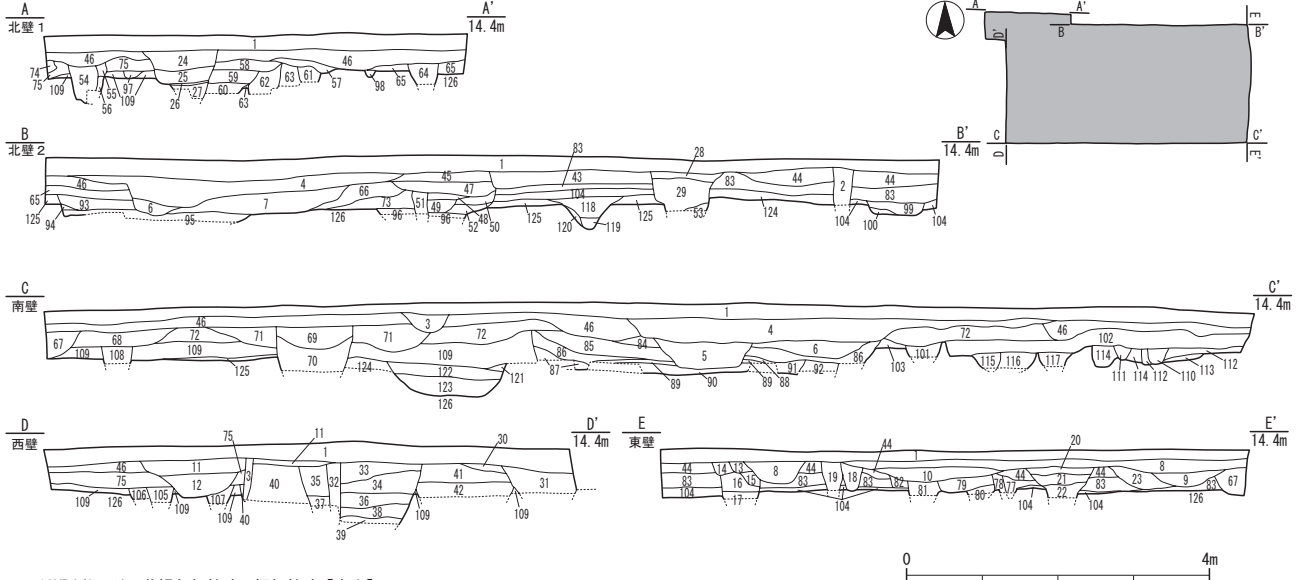
調査の結果、飛鳥から奈良時代の遺構が複数確認できた。飛鳥時代は竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟を確認し、どちらも類似する主軸の傾きをもつ。奈

良時代は掘立柱塀2列で、そのうち、塀の一方では北東の隅部を確認した。その他、弥生時代の土坑2基や奈良時代以降の塀、また掘立柱建物と考えられる柱穴を確認したものの、調査区外に続くため、正確な時期や規模はわからなかった。

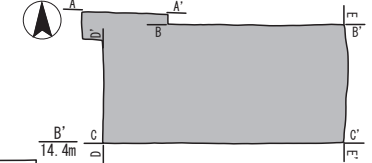


第Ⅱ-3図 第189次調査 遺構平面図 (1:100)

調査区壁断面図



断面位置図



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂【表土】
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト【カクラン】
- 3 10YR3/2黒褐色細粒砂～極細粒砂【カクラン】
- 4 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト【SD11020上層】
- 5 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト【SD11020下層】
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト【SD11020下層】
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～シルト【SD11020下層】
- 8 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト【土坑?】
- 9 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色シルトに地山ブロックを5%含む【土坑?】
- 10 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%、炭化物をわずかに含む【土坑?】
- 11 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【土坑?】
- 12 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【土坑?】
- 13 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【不明建物柱穴?】
- 14 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト【不明建物柱穴?】
- 15 8層に地山ブロックを5%含む【不明建物柱穴?】
- 16 17層に8層を5%含む【不明建物柱穴?】
- 17 10YR3/2黒褐色シルト【不明建物柱穴?】
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色シルト【根カクラン?】
- 19 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色シルトに地山ブロックを5%含む【ビット埋土】
- 20 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【不明建物柱穴?】
- 21 10YR3/3暗褐色シルトに地山ブロックを10%含む【不明建物柱穴?】
- 22 10YR2/2黒褐色シルトに地山ブロックを5%含む【不明建物柱穴?】
- 23 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトにφ20cm以下の礫をわずかに含む【土坑?】
- 24 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【SB11015柱穴】
- 25 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【SB11015柱穴】
- 26 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂、しまり強【SB11015柱穴】
- 27 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【SB11015柱穴】
- 28 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【不明建物柱穴?】
- 29 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【不明建物柱穴?】
- 30 10YR3/3暗褐色極細粒砂に地山ブロックを3%含む【土坑?】
- 31 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂に地山ブロックを3%含む【土坑?】
- 32 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト、しまり弱【SB11015柱痕跡】
- 33 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色シルトに地山ブロックを20%含む【SB11015柱掘形】
- 34 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【SB11015柱掘形】
- 35 10YR2/3黒褐色シルト【SB11015柱掘形】
- 36 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに34層を10%含む【SB11015柱掘形】
- 37 10YR2/2黒褐色シルトに地山ブロックを3%含む【SB11015柱掘形】
- 38 34層と同じ、しまり極弱【SB11015柱掘形】
- 39 10YR2/2黒褐色シルトに地山ブロックを5%含む【SB11015柱掘形】
- 40 10YR2/2黒褐色シルトに地山ブロックを1%含む【土坑?】
- 41 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト【土坑?】
- 42 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【土坑?】
- 43 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【土坑?】
- 44 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～シルト【土坑?】
- 45 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【包含層?】
- 46 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト【奈良～平安時代包含層】
- 47 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】
- 48 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに炭化物をわずかに含む【ビット】
- 49 10YR2/2～2/3黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【ビット】
- 50 10YR4/4褐色粘土【ビット】
- 51 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 52 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト、しまり極強【ビット】
- 53 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】
- 54 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルトに地山ブロックを1%含む【SA9472柱穴1 抜取痕】
- 55 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【SA9472柱穴1 抜取痕】
- 56 55層に10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトを10%含む【SA9472柱穴1 抜取痕】
- 57 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
- 58 10YR3/4暗褐色細粒砂～シルト【不明建物柱掘形】
- 59 10YR3/4暗褐色細粒砂～シルトに地山ブロックを3%含む【不明建物柱掘形】
- 60 10YR3/3～4/4暗褐色～褐色細粒砂～シルトに地山ブロックを3%含む【不明建物柱掘形】
- 61 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】
- 62 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト【SA9472柱穴2 掘形】
- 63 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
- 64 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 65 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【包含層】
- 66 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色極細粒砂～シルト【包含層】
- 67 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 68 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに67層を30%含む【土坑?】
- 69 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【SA11018柱穴4】
- 70 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【SA11018柱穴4】
- 71 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【SA11018柱穴4 関連遺構?】
- 72 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【包含層】
- 73 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト【包含層】
- 74 10YR3/4暗褐色細粒砂～シルト【カクラン?】
- 75 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【包含層?】
- 76 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト【包含層?】
- 77 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】
- 78 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 79 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】
- 80 10YR2/2～2/3黒褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 81 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを3%含む【ビット】
- 82 10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 83 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを1%含む【ビット】
- 84 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト【SH11014】
- 85 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト【SH11014】
- 86 10YR3/2黒褐色極細粒砂～シルトに87層ブロックを5%含む【SH11014】
- 87 10YR4/4褐色粘土【SH11014】
- 88 10YR3/4暗褐色シルト【SH11014】
- 89 10YR2/3黒褐色シルトに地山粒子を40%含む、しまり極強【SH11014貼床】
- 90 10YR2/2黒褐色シルト【SH11014床下遺構?】
- 91 10YR2/3黒褐色シルト【SH11014床下遺構】
- 92 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト【SH11014床下遺構】
- 93 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【SH11013】
- 94 10YR4/4褐色シルト【SH11013】
- 95 10YR4/4～4/6褐色シルトに93層を20%含む【SH11013貼床】
- 96 10YR3/4～4/4暗褐色～褐色極細粒砂～シルト【ビット下層】
- 97 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 98 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 99 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト【ビット】
- 100 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 101 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色シルト【ビット】
- 102 10YR2/3黒褐色シルト【ビット】
- 103 10YR3/3暗褐色シルト【ビット】
- 104 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト【包含層】
- 105 10YR3/3暗褐色極細粒砂【ビット】
- 106 10YR3/4暗褐色極細粒砂【ビット】
- 107 10YR3/3暗褐色極細粒砂【ビット】
- 108 10YR2/3黒褐色シルト【ビット】
- 109 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト【包含層】
- 110 10YR3/2黒褐色シルト【ビット】
- 111 10YR2/2黒褐色シルト【ビット】
- 112 10YR3/2黒褐色シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】
- 113 10YR3/3暗褐色シルト【ビット】
- 114 10YR3/3暗褐色シルト【ビット】
- 115 10YR3/3暗褐色シルト【ビット】
- 116 10YR2/3黒褐色シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】
- 117 10YR3/3暗褐色シルト【ビット】
- 118 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 119 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 120 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 121 10YR4/4～4/6褐色シルト【地山ブロック】
- 122 10YR2/3黒褐色シルトに地山ブロックを1%含む【SK11012】
- 123 10YR2/3黒褐色シルト【SK11012】
- 124 10YR3/3暗褐色シルト【土坑?】
- 125 10YR4/4褐色極細粒砂～シルト【ビット】
- 126 10YR4/4褐色シルト【地山】

第Ⅱ-4図 第189次調査 土層断面図 (1/100)

(1) 弥生時代の遺構

SK 11011 h15で確認した土坑である。平面形は、長さ2.4 m、幅2.1 mの隅丸長方形を呈す。断面は深さ0.3 mの皿状である。西端には弥生土器の壺を埋設したピットが重複していた。壺の内部の埋土は灰色シルトで、SK 11011内埋土の黒褐色系シルトとは明らかに異なっていた。また壺内からはサヌカイト製の石鏃が1点出土した。遺物はピット内から、弥生土器壺(1・5)、サヌカイト製の石鏃(2)、土坑内からは弥生土器(3・4)が出土し、遺構の時期は弥生時代前期と考えられる。

SK 11012 h15で確認した土坑である。平面形は、長さ1.3 m以上、幅0.7 m以上の隅丸方形を呈す。断面は深さ0.5 mの逆台形である。出土遺物に弥生土器の小片が目立ち、SK 11011などと同様の時期の遺構と推測する。

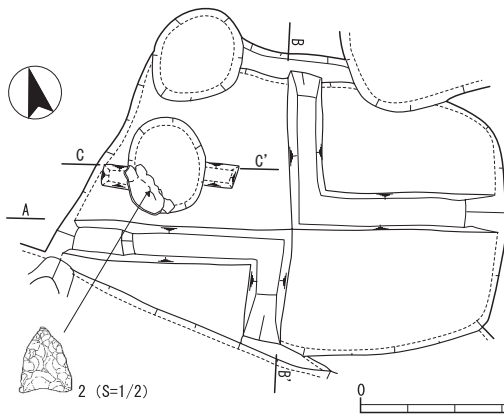
(2) 斎宮 I - 1 期前後の遺構

SH 11013 g・h14で確認した竪穴建物である。平面形は、長軸6.1 m、短軸3.9 mの隅丸長方形を呈す。主軸は長軸がN 53 ~ 55° W、検出深度は浅く、地山面からは0.15 mしかない。西側で後世のSD 11020が重複している。外周には周壁溝がめぐり、西側には貼床が施されていたが、明確な柱穴や貯蔵穴等は確認できなかった。一方、北東隅部には粘土塊が床面に接して置かれていた。遺物は床面に接して須恵器杯G蓋(27)が出土した。遺構の時期は飛鳥時代と考えられる。

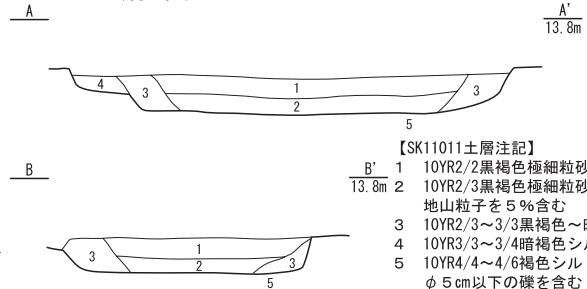
SH 11014 f14 ~ h15で確認した竪穴建物である。平面形は、長軸7.2 m、短軸4.5 mの隅丸長方形を呈す。主軸はSH 11013と同じで、長軸がN 53 ~ 55° Wとなる。検出深度は、地山面からは0.3 mである。後世のSA 9472やSD 11020が重複している。床面には厚さ約5 cmの貼床が施されており、その下層からもピットなどの遺構を確認したが、明確な柱穴や貯蔵穴等は確認できなかった。南東隅部には粘土塊が床面に接して置かれていた。遺物は床面からの出土はなかったものの、また、上層から須恵器円面硯(28)が出土した。同グリッド内包含層からは鞆羽口と考えられる土製品(56)や鉄滓(57)などが出土している。遺構の時期は、主軸の方向がSH 11013と同じとなるため、飛鳥時代と推測する。

SB 11015 f13 ~ f15で確認した総柱建物である。SA 9472が重複する。大部分の柱が調査区外に続くと推測されるため、正確な建物の規模はわからない。主軸は、南東辺でN 34° Eとなる。他の遺構との重複が目立つため、明確な柱掘形規模は明らかではないが、一辺0.8 ~ 1.0 m前後の略方形と推測できる。調査区西壁には、この建物の柱掘形および柱痕跡と推測できる落ち込みが確認でき、地山面から約0.8 m以上の深さがある。遺物は小型の土師器杯(29)が出土しているものの、掘形内部からの出土ではなく、後世の混入も考えられる。遺構の時期は、主軸の方向がSH 11013・11014とほぼ同じとなるため、飛鳥時代と考えられる。

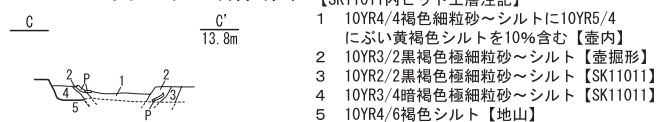
SK11011 出土状況図



SK11011 断面図



SK11011 内ピット断面図



第II-5図 第189次調査 SK 11011 出土状況図・土層断面図 (1/40)

(3) 斎宮 I - 2・3期以降の遺構

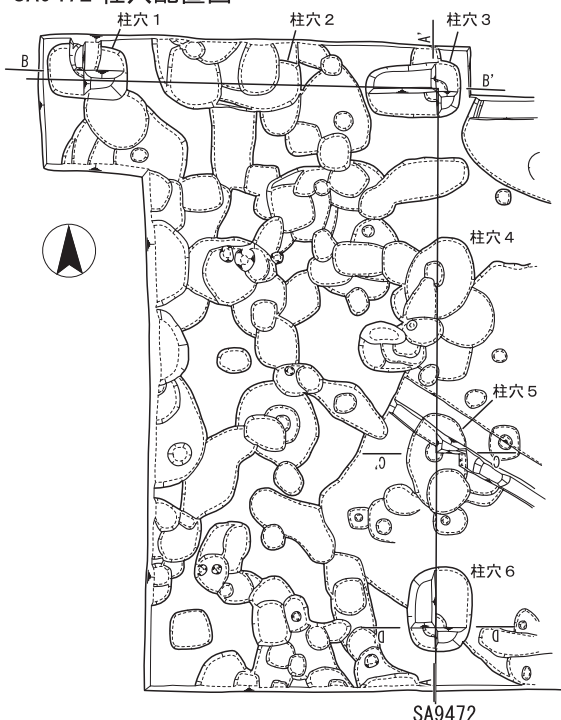
SA 9472 e13 ~ f15 で確認した掘立柱塀である。当初、南北列の4基の柱穴を検出したが、北端の柱穴3の掘形が東西方向に長い平面形であったため、この柱穴3が北東隅部と推測し、調査区を北に約0.5 m、西に約1.5 m拡張した。その結果、西に続く柱穴1・2を確認し、柱穴3がSA 9472の北東隅部であることがわかった。また、柱穴1~6の計6基のSA 9472の柱穴を確認した。

まず柱掘形について、南北列の柱掘形は柱穴5・6に顕著なように南北に細長い隅丸長方形を呈す。一方、東西列の柱掘形は東西に細長い隅丸長方形を呈し、柱穴1・2ともに北側へ柱抜き取り痕跡が確認できる。柱掘形の規模は、柱穴1が長軸1.05 m、短軸0.7 m、深さ0.5 m、柱穴2が長軸1.0 m以上、短軸0.7 m、柱穴3が長軸1.3 m、短軸0.7 m、深さ0.5 m、柱穴4が長軸1.1 m、短軸0.9 m、柱穴5が長軸1.2 m、短軸0.7 m、深さ0.7 m、柱穴6が長軸1.1 m、短軸0.9 m、深さ0.65 mとなる。柱痕跡を確認できたものは、径0.2~0.3 m程の円形を呈す。柱間は南北列2.4 m、東西列は抜き取られているため、正確ではないが、ほぼ2.4 mである。主軸は南北列でN1°E、東西列はこれにほぼ直交するため、S

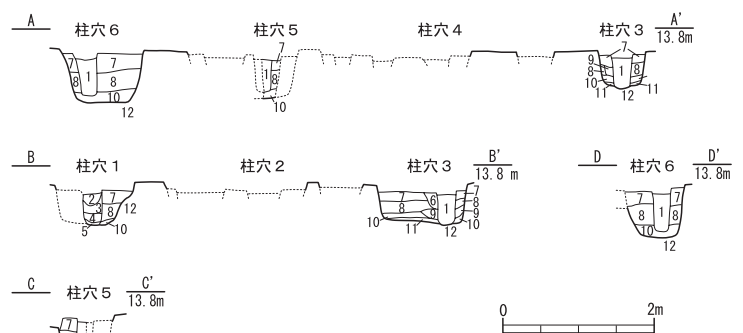
A 9472に圍繞される区画は、ほぼ正方位であると言えよう。過去の調査を含めたSA 9472全体の検討については第5章まとめに記載する。遺物は柱穴4から、内面に漆が塗布された土師器の壺(30)が出土している。その他にも土器片が出土しているものの弥生土器や土師器細片であった。遺構の時期は、第146次調査時に、柱穴から奈良時代に遡る土師器杯Gが出土しており、奈良時代と考えられる。

SA 11016・11017 i14・15で確認した南北にのびる2列の掘立柱塀である。SA 11016はSA 11017よりも古く、掘形は一辺0.8~1.0 mの隅丸方形を呈す。北側の柱穴1~4は布掘り状の掘形であったが、浅く様相は不明瞭であった。柱間は柱痕跡が明確ではなく不明瞭であるが、SA 11017よりも掘形が大型であるため、柱間もやや広い可能性がある。SA 11017はSA 11016と同じ場所に重複して建てられているが、SA 11016よりも小規模で平面楕円形の掘形が用いられている。このことからSA 11016が廃絶し、柱穴が埋没した後にSA 11017が建てられたものと推測できる。つまり、両者には一定の時期差を想定すべきであろう。柱間は北から2.3 m、2.3 m、2.0 mとなり、南端の柱穴は同一遺構とは断定できない。柱痕跡は確認できるもので径0.2

SA9472 柱穴配置図



SA9472 土層断面図



【SA9472土層注記】

- 1 10YR3/3暗褐色細粒砂~シルト【柱穴3・5・6柱痕跡】
- 2 10YR3/4暗褐色細粒砂~シルト【柱穴1抜取痕】
- 3 10YR3/3暗褐色細粒砂~シルトに地山ブロックを3%含む【柱穴1抜取痕】
- 4 10YR2/3黒褐色シルト【柱穴1抜取痕】
- 5 10YR2/2黒褐色シルト【柱穴1抜取痕】
- 6 10YR2/3黒褐色シルト【柱穴3掘形】
- 7 10YR3/2黒褐色シルトに地山ブロックを5%含む【柱穴1・3・5・6掘形】
- 8 10YR3/3黒褐色シルトに地山ブロックを5%含む【柱穴1・3・5・6掘形】
- 9 10YR4/4褐色シルト【地山ブロック】
- 10 10YR3/3暗褐色シルトに地山ブロックを30%含む【柱穴1・3・5・6掘形】
- 11 10YR2/3黒褐色シルトに地山ブロックを10%含む【柱穴3掘形】
- 12 10YR4/6褐色シルト【地山】

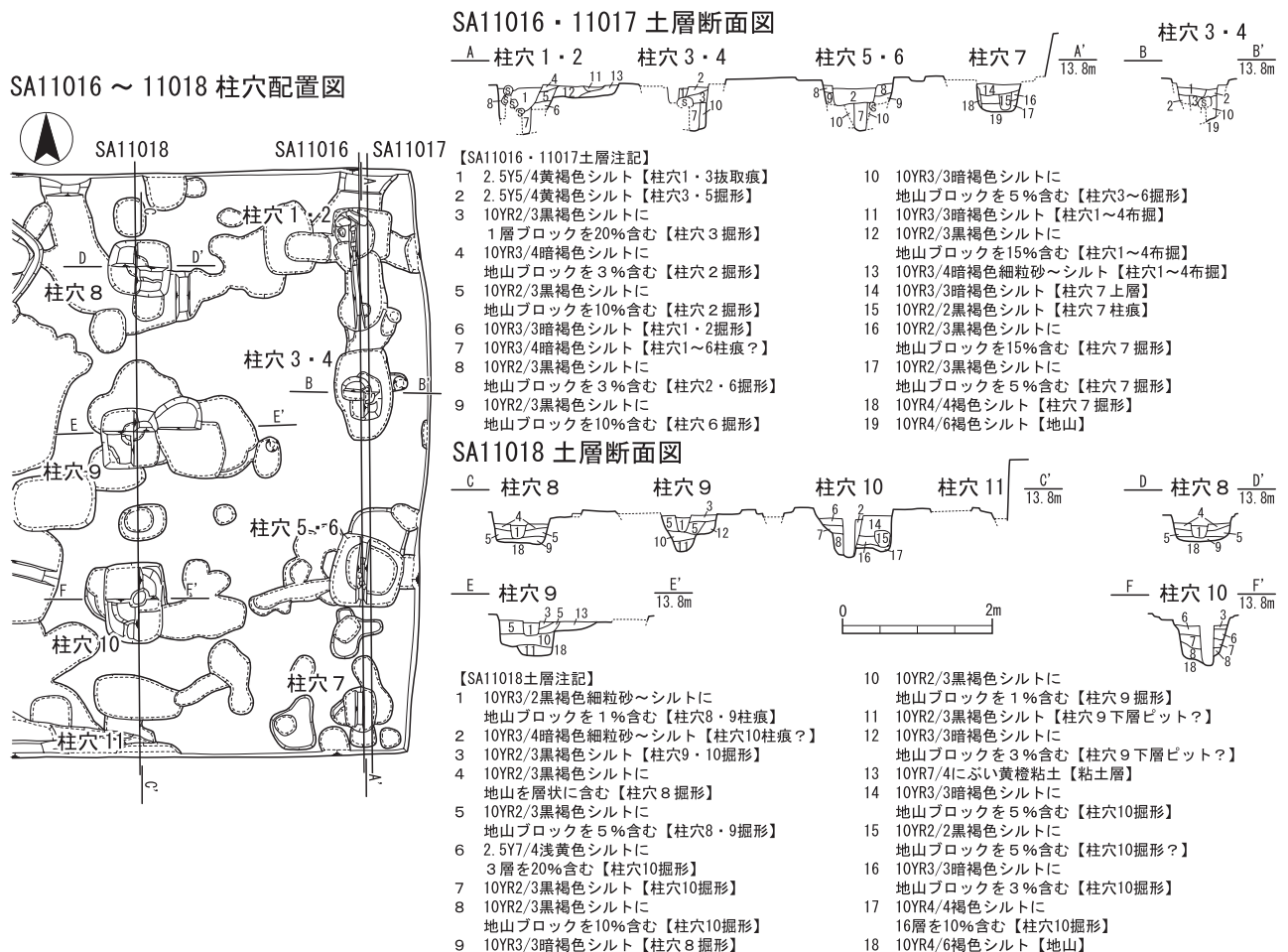
m、柱の深さは0.7 mと S A 9472 と同様か、それ以上に深い。この S A 11016・11017 と同様の柵跡と考えられる遺構には、第 189 次調査区の北東に位置する第 100 次および 144 次調査で確認された S A 9093・9094 がある。ただし S A 9093、9094 は東西列であるため、南北列である S A 11016・11017 と連なるのであれば、S A 9472 と同様に方形区画を構成する可能性が高まるが、詳細は第 5 章まとめに記載する。遺物は、どちらも土師器片が出土したものの図化できるものはなかった。遺構の時期は不明であるが、主軸がほぼ正方位となることから飛鳥時代よりも新しく、奈良時代以降と考えられる。

SA 11018 i14・15 で確認した南北列の掘立柱塀と推測される柱列である。調査区内では 4 基の柱穴を確認し、南端の柱穴は大部分が調査区外に続くため不明であるが、北側 3 基の掘形平面は約 0.8 m 四方の隅丸方形となる。主軸は N 1° W で、ほぼ正方位

である。柱間はいずれも 2.3 m で、掘形の深さは 0.4 ~ 0.7 m とやや差がある。遺物は北側の柱掘形から土師器の鍋 (31) が出土している。遺構の時期は出土遺物が少ないため、明確ではないが、主軸がほぼ正方位であることから奈良時代以降と考えられる。

S B11019 i14 で確認した掘立柱建物とみられる柱穴で、掘形は長軸 1.0 m、短軸 0.7 m の隅丸方形とやや大型のものである。柱穴 1 基のみの確認であるが、東方向に抜き取り痕跡がみられたため、建物跡と推測して報告する。今後、隣接地の調査により確認できるであろう。遺物は土師器小片のみの出土で、遺構の時期は不明であるが、柱穴の長軸方向が建物軸であれば正方位に近いと、奈良時代以降と考えられる。

SD 11020 g14・15 で確認した直線的な溝である。検出した長さは 8.7 m で、南北ともに調査区外へ続く。検出面では幅 0.9 m であるが、調査区壁断面で



第 II - 7 図 第 189 次調査 S A 11016・11017 土層断面図 (1/100)

確認できた上端面の幅は、北側断面で4.3 m、南側断面で5.5 mあり、かなり幅広の溝であったと推測できる。検出面からの深さは0.5～0.6 mである。遺物は土師器・須恵器片のみの出土で、遺構の時期は不明であるが、SH 11013およびSH 11014より後出して重複していることから、飛鳥時代より新しく、SA 9472 南北列の東約1 mの位置に並行して掘られていることから奈良時代以降と考えられる。

4 遺物

遺物整理用コンテナ 17箱分の遺物が出土したが、

遺構からの出土よりも、包含層や表土からの出土が多い。

(1) 弥生時代の遺物

SK 11011 出土遺物(1～5) SK 11011内のピットから金剛坂式の壺の胴部(1)、底部(5)と(1)の内部からサヌカイト製の石鏃(2)が1点出土した。(2)の石鏃は基部が凹む凹基式のもので、長さ1.8cm、重さ1.2 gと小型鏃⁽¹⁾に該当し、石鏃が大型化する傾向のある中期以前のもものと推測され、壺の時期との矛盾はない。SK 11011からは口縁部に刻み目をもつ甕(3)、楕円形押圧のみられる2

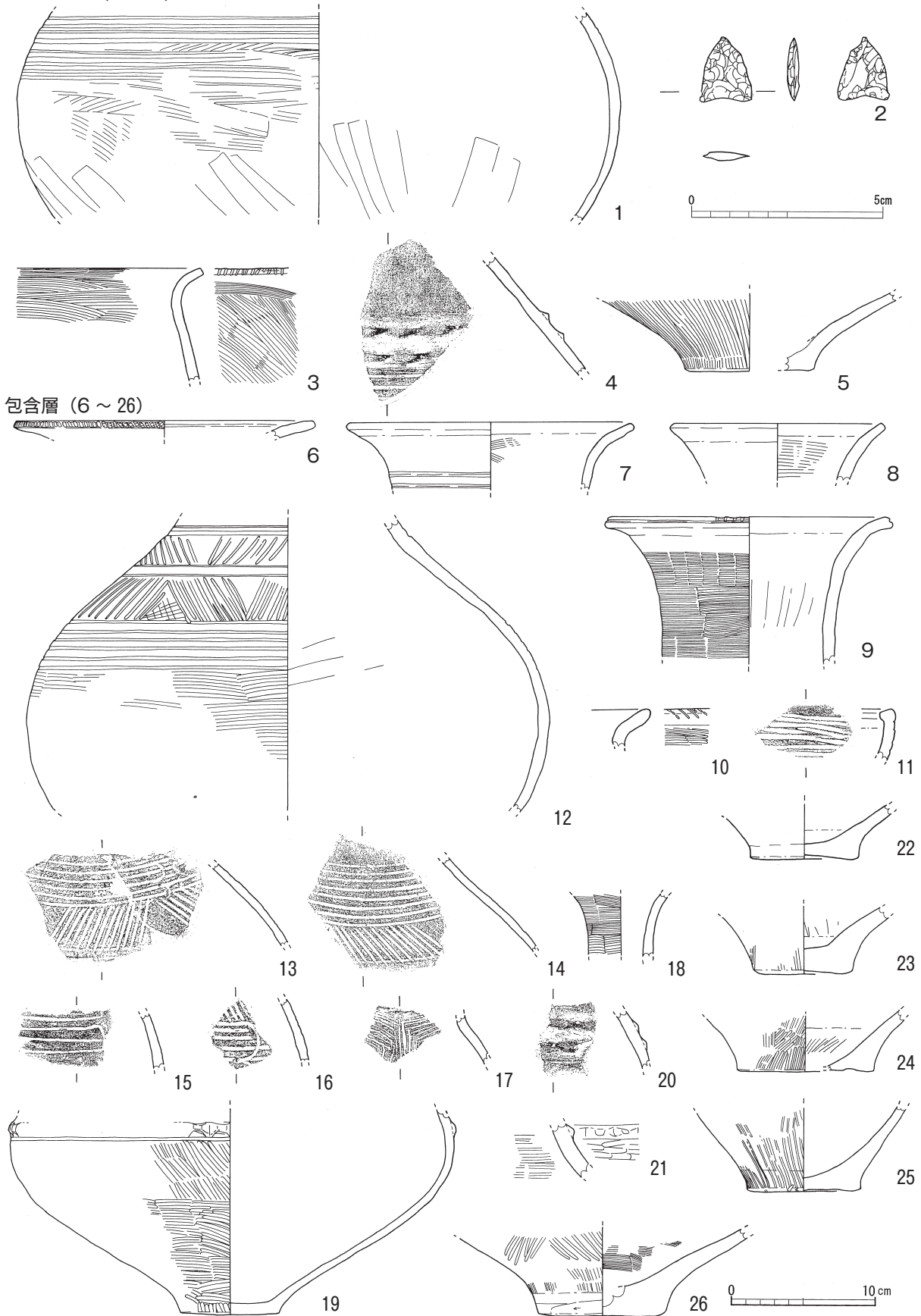
遺構名	調査時遺構名	ピット番号	時期	規模	柱間寸法(m)	主軸	方位	備考
		※()はグリッド番号		間(m)×間(m)			(N規準)	
SA 9472	塀1	(e14)p8/(f14)柱穴1,柱穴2/(f15)柱穴3,柱穴4	I-2 ～ I-3	南北24?(約57) 東西20?(約48)	2.4	南北 東西	N1° E N87° W	掘立柱塀 奈良時代区画
SB 11015	掘立1	(f13)土坑 5/(f14)p1,p9/(f15)p1	I-1 前後	2以上(4.4以上) 1以上(2.2以上)	約2.1	不明	N34° E	総柱建物
SA 11016	柵2	(i14)p10,p11/(i15)p10,p11	I-2 以降	2以上(7以上)	2.3	南北	N1° E	掘立柱塀 奈良時代区画
SA 11017	柵1	(i14)p1,p9/(i15)p8,p9	I-2 以降	2以上(7以上)	2.3以上	南北	N1° W	掘立柱塀 奈良時代区画
SA 11018	柵3	(i14)p5,p7/(i15)p2,p6	I-2 以降	3以上(6.8以上)	2.3	南北	N1° W	柵
SB 11019	掘立2	(i14)p4	I-2 以降	不明	不明	不明	不明	不明柱穴

第Ⅱ-1表 第189次調査 掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK 11011	土坑9	h15	弥生前期	弥生土器壺、石鏃	ピット出土壺内部から石鏃出土
SK 11012	土坑10	h15	弥生前期	弥生土器	
SH 11013	竪穴2	g14～ h14	I-1 以前 (飛鳥Ⅲ)	須恵器杯蓋、土師器片	長軸N53～55° W
SH 11014	竪穴1	f14～h15	I-1 以前 (飛鳥Ⅲ)	土師器片	長軸N53～55° W
SD 11020	溝1	g14～g15	I-2 以降	土師器片、須恵器片	SA9472と並行

第Ⅱ-2表 第189次調査 遺構一覧表

SK 11011 (1~5)



第Ⅱ-8図 第189次調査 出土遺物実測図1 (2のみ2:3、その他は1:4)

条の突帯と並行沈線文がめぐる壺胴部（4）が出土している。ピット内の土器と含め、金剛坂式の中でも遠賀川系4期⁽²⁾まで下るものである。

包含層出土遺物（6～26） 掲載した弥生土器の大半は、包含層から出土したものである。（6）は甕もしくは壺の口縁部である。口唇部に貝殻による刻み目、内面には一条の沈線が施されている。（7～10）は壺の口縁部で、（7）は口縁部が外反し、頸部側に二条の並行沈線が施されている。（8）は口縁部が緩やかに外反する。（9）は口唇部に一条の沈線と刻み目が施されている。頸部には櫛引きされている。（10）は細片であるが、口唇部に刻み目が施されている。（11）は浅鉢で、外面に条痕文がみられる。（12～17、20・21）は壺の体部で、（12～14）は沈線による綾杉文と横線文からなる。また（12）には綾杉文の間に格子状の線刻が施されている。（15・16）は沈線による流水文状の表現であろうか。（17）は綾杉状の沈線文がみられる。（20）は（4）と類似し、二条の楕円形押圧のある突帯がめぐる。（21）は一条の楕円形押圧のある突帯が残存している。（18）は細頸壺の頸部で、外面には貝殻による押し引きが施されている。（19）は壺底部から胴部で、（1・12）などと比較すると薄手である。胴部に菱形状押圧のある突帯が一条残存している。（22～26）はいずれも壺の底部で、（24）のみ上げ底状となる。

以上、包含層から出土した弥生土器は、細片も多いが、いずれも金剛坂式の範疇に含まれるものと言える。その所属時期は遠賀川系4期、弥生時代前期後半のものが主体であるが、（9）や（18）など、一部は中期前半までくだるものも含まれている。

（2）飛鳥時代以降の遺物

SH 11013 出土遺物（27）（27）は須恵器杯Gの蓋で、宝珠ツマミが打ちかかっている。内面にはヘラ記号および墨痕がみられた。法量は口径10cm前後となり都城の土器編年では飛鳥Ⅲ期⁽³⁾に該当する。これは斎宮Ⅰ-1期を飛鳥Ⅳ期以降としていることから、斎宮Ⅰ-1期以前に遡るものである。

SH 11014 出土遺物（28）（28）は須恵器円面硯の台部、あるいはその他の台部の可能性がある。後世の混入品と推測される。

SB 11015 出土遺物（29）（29）は小型の土師器杯もしくは椀であるが、小片であるため正確な時期は不明である。

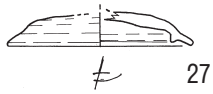
SA 9472 出土遺物（30）（30）は土師器壺もしくは甕の小破片で、内面に多数の格子状の刻みが施されており、その上に厚く漆が付着していた。

SA 11018 出土遺物（31・32）（31）は土師器鍋だが、斎宮Ⅰ-1期以降継続的にみられる器種であり、時期別特徴も顕著ではないため、正確な時期は不明である。（32）は土師器の板状土製品だが、甕の底部の可能性もある。

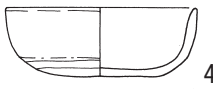
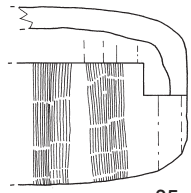
ピット・包含層・表土出土遺物（33～62）

（33・34）は須恵器杯Gの蓋である。どちらもSH 11013の上層である包含層から出土しており、（27）と同様に本来はSH 11013に伴っていたものと推測される。（33）は宝珠ツマミが人為的に外されており、欠損部が磨かれて整えられている。（34）は唯一、宝珠ツマミが残存している固体である。どちらも口径10cm程で、飛鳥Ⅲ期に該当する。（35）は小型の須恵器横瓶で、外面にカキ目がみられる。7世紀代のものと考えられる。（36）は須恵器杯Bの蓋で、飛鳥Ⅳ期以降と考えられる。（37）は須恵器円面硯の台部あるいは、その他の台部の可能性もある。（38・39）は（30）と同様に、土師器壺か甕で、内部に蜘蛛の巣状の刻み目があり、厚く漆が付着している。（39）は外面に黒斑がみられ、在地の通常の土師器焼成とは異なる焼成方法で製作されていた可能性がある。（40）は土師器杯Bか皿B蓋の宝珠ツマミ部で、口径などはわからないため、時期は不明瞭であるが、飛鳥Ⅳ期以降と考えられる。（41・42）は「いなか椀」と呼ばれる土師器杯Gで、斎宮Ⅰ-1期からⅡ-1期まで継続する器種であるため、時期の断定は困難であるが、底部から強く丸みを帯びており、口径も小ぶりであることから、特徴としては古くみえ、斎宮Ⅰ-1～Ⅰ-2期の資料と考えられる。（43）は小型の土師器把手付甕で、斎宮では平安時代の内院である鍛冶山西区画の調査で斎宮Ⅱ-4期に該当する類似品が3点みられる。ただし、（43）は甕の特徴から、この3点よりも古相を示している。正確な時期は不明であるが、平安時代まで下る可能性は否定できない。（44）は土師器甕、（45）は土師器鍋B

S H11013 (27)



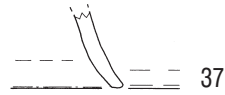
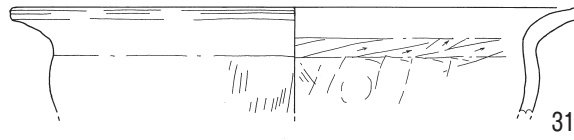
ピット・包含層・表土 (33~62)



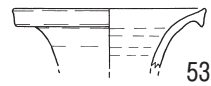
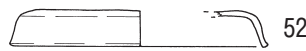
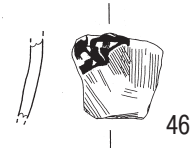
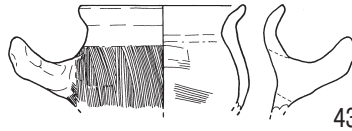
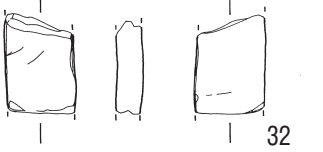
S H11014 (28)



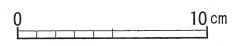
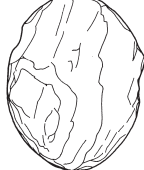
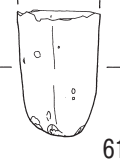
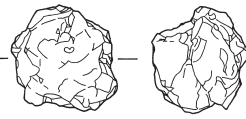
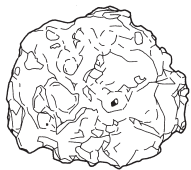
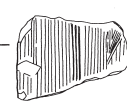
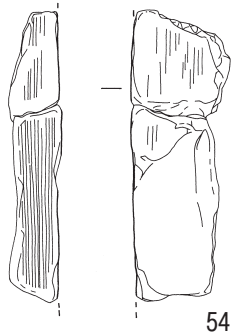
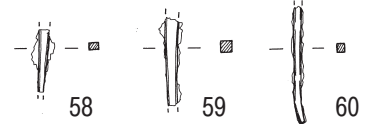
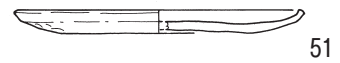
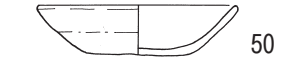
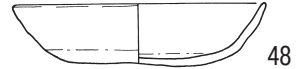
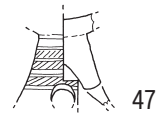
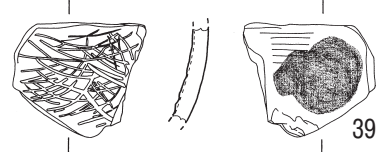
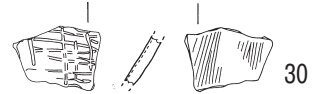
S A11018 (31-32)



S B11015 (29)



S A 9472 (30)



第II-9図 第189次調査 出土遺物実測図2 (1:4)

で、奈良～平安時代前期のものであろう。(46)は土師器甕などの小片で、外面に墨書がみられるものの、書かれている内容は判読できない。(47)は土師器高杯であるが、弥生時代終末期～古墳時代初頭に該当するものである。(48・49)は土師器杯A、(50)は土師器椀A、(51)は土師器皿Aで、いずれも斎宮Ⅱ-2期に該当する。(52)は須恵器蓋、(53)は須恵器瓶類の口縁部と考えられるが、正確な時期は不明である。(54・55)は不明の板状土製品で、内外面にハケが施され、端部は下方に突出する。端部は直線的で、曲面はみられない。類似する資料として形象埴輪などが挙げられるものの、周囲に古墳などは確認されておらず、全体像のわかる資料の確認が期待される。(56)は外面に鉄滓状のガラス質が付着した土製品で、内面はやや曲面をもつ。この点から鞆羽口と推測するが、小破片であり正確には不明瞭である。(57)は椀形滓である。(56・57)はどちらも包含層であるが、S H 11014 上層から出土しており、本来はS H 11014 に伴っていた可能性がある。(58～60)は鉄釘と考えられる。いずれも上・下端部が欠損している。(61)は砂岩製の石杵、(62)は結晶片岩製の温石と考えられる。

(1) 佐原真ほか1964『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会

(2) 石黒立人・宮腰健司2007「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古稀記念考古学論文集』同刊行会

(3) 西弘海1978「B 土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所

5 まとめ

第189次調査では、飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物、奈良時代の掘立柱塀など、飛鳥・奈良時代の斎宮の解明につながる重要な発見があった。最後に、この章では第189次調査成果に過去の周辺の調査成果を加えて、中垣内地区における飛鳥・奈良時代の斎宮の様相を確認したい。

(1) 飛鳥時代の遺構について

中垣内地区における飛鳥時代の遺構は、段丘崖から約50mの場所に位置する飛鳥時代の塀S A 6280が飛鳥時代斎宮の中核を囲う施設として重要視され

てきた。この塀が西あるいは東に展開するか、あるいは囲みとはならないのかは今後の調査の課題であるが、この塀がN 33° Eの傾きを持つことから、飛鳥時代のその他の遺構が、このN 33° Eの傾きに制約を受けている可能性が高い。今回の調査で確認したS H 11013・11014も短軸の傾きはN 35～37° Eで、近い数値となる。過去の発掘調査で、平成19年度までに、中垣内地区内で確認された竪穴建物は飛鳥時代で14棟⁽¹⁾あるが、誤差はあるものの、いずれもほぼ同様の傾きをもって建てられている。こうした飛鳥時代の竪穴建物には、S H 11013・11014のように飛鳥Ⅲ期に遡るものが含まれている。この飛鳥Ⅲ期は実年代的には近江大津宮遷都を契機とする660年代後半から670年代が想定されており⁽²⁾、制度上の最初の斎王が設けられる674年よりも古い年代となる。つまり、674年以前には、中垣内地区内に複数の竪穴建物が建てられている。これらの建物の性格としては、上層面からであるが鞆羽口や椀形滓の出土がみられることから、飛鳥時代の斎宮造成に伴う、工房のような施設であった可能性が考えられる。

(2) 奈良時代の遺構について

今回の調査では、奈良時代の斎宮に関する極めて重要な成果があった。一つはS A 9472が囲う奈良時代の区画1の北東隅部の確認である。S A 9472は第146次調査で確認された奈良時代前期、聖武朝の井上内親王の群行に伴い整備された区画の可能性が指摘されていた⁽³⁾。ただ、その区画の規模は具体的にはわかっておらず、今後の課題であるとされていた。しかし、第189次調査区で北東隅部を確認できたことで、区画の南北規模が58.5m(約195尺)であることが確定したと言える。また東西規模に関しては、第58-4次で西辺部と推測できる柱列が2列あり、外側で想定した場合は52.5m(175尺)、内側では48m(160尺)となる。ただし、第58-4次調査の柱穴の規模などを勘案すると、内側の可能性が高いと考えられる。

二つ目はS A 9472と並行し、もう一つの奈良時代の区画が存在する可能性が浮上した点である。第100次調査で既に北辺と推測できる柱列(S A 9093・9094)は確認できていたが、今回のS A

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	弥生土器	壺	SK11011 内ピット No.2	最大径 42.0 残高 14.5	外面:ハケ・篋描沈線文・ 板ナデ・ミガキ 内面:ヘラケズリ・ナデ	密	良	にぶい褐 7.5YR5/4	胴まわり 1/12		006-02
2	石器	石鏃	SK11011 内ピット No.1	長さ 1.8 幅 1.45 厚さ 0.3	石材:二上山サスカイト 重さ:1.25g	—	—	黄灰2.5Y5/1	完形		012-01
3	弥生土器	甕	SK11011 トレンチ 内	残高 7.8	外面:条痕文・刻み目・ ヨコナデ 内面:条痕文・ヨコナデ	密	良	灰黄褐 10YR5/2	口縁部 1/12未満		008-03
4	弥生土器	壺	SK11011 トレンチ 内	残高 8.3	外面:突帯貼付・横線文・ ミガキ 内面:ハケ・ナデ	密	良	灰黄褐 10YR5/2	—		007-02
5	弥生土器	壺	SK11011 内ピット No.2	底径 8.3 残高 5.5	外面:ハケ・ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	底部 2/12		007-01
6	弥生土器	甕	包含層	口径 20.3 残高 1.2	外面:ナデ・櫛による刻み 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12		001-07
7	弥生土器	壺	包含層	口径 19.5 残高 4.7	外面:ミガキ・ナデ・横線文 内面:ハケ・ナデ	密	良	にぶい黄褐 10YR5/3	口縁部 1/12		001-05
8	弥生土器	壺	包含層	口径 14.3 残高 3.9	外面:ミガキ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12未満		001-06
9	弥生土器	壺	包含層	口径 19.1 残高 10.2	外面:櫛描直線文・ヨコナデ ・櫛ナデ 内面:ミガキ・ナデ	密	良	浅黄橙 10YR3/3	口縁部 1/12未満		004-04
10	弥生土器	壺	包含層	残高 2.6	外面:ミガキ・ナデ・刻み目 内面:ミガキ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12未満		007-03
11	弥生土器	浅鉢	包含層	残高 3.6	外面:条痕文・ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12未満		002-03
12	弥生土器	壺	包含層	最大径 36.4 残高 20.5	外面:篋描沈線文・山形 沈線文・格子文・板 ナデ・ミガキ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	胴まわり 3/12	外面一部 に漆付着	005-02
13	弥生土器	壺	包含層	残高 5.8	外面:篋描沈線文・山形 沈線文 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	—		004-01
14	弥生土器	壺	包含層	残高 6.6	外面:篋描沈線文・山形 沈線文 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—		002-02
15	弥生土器	壺	包含層	残高 3.9	外面:沈線文 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	—		002-06
16	弥生土器	壺	包含層	残高 4.4	外面:沈線文 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	—		007-04
17	弥生土器	壺	包含層	残高 3.5	外面:矢羽状沈線文 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	—		002-04
18	弥生土器	細頸 壺	包含層	残高 4.5	外面:櫛描直線文 内面:オサエ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	頸まわり 3/12		007-05
19	弥生土器	壺	包含層	底径 6.7 残高 14.4	外面:突帯貼付・ミガキ・ オサエ・ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR5/3	底部 10/12	外面一部に 赤漆付着	010-01
20	弥生土器	壺	包含層	残高 4.0	外面:突帯貼付 内面:ナデ	密	良	褐灰10YR4/1	—	外面に黒漆 塗布か?	002-05
21	弥生土器	壺	包含層	残高 3.8	外面:突帯貼付・ミガキ 内面:ハケ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—		007-06
22	弥生土器	壺	包含層	底径 7.0 残高 3.8	外面:ミガキ・ナデ 内面:工具ナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	底部 完形		005-01
23	弥生土器	壺	包含層	底径 5.7 残高 4.6	外面:ミガキ・ナデ 内面:工具ナデ・ナデ	密	良	橙2.5YR6/6	底部 完形		004-05
24	弥生土器	壺	包含層	底径 8.8 残高 4.3	外面:ミガキ・ケズリ 内面:ミガキ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 3/12		001-08
25	弥生土器	壺	包含層	底径 7.0 残高 6.0	外面:ミガキ・ナデ 内面:ミガキ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	底部 完形		004-03
26	弥生土器	壺	包含層	底径 8.8 残高 6.1	外面:タテハケ・ミガキ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	底部 8/12		006-01
27	須恵器	杯G 蓋	SH11013 No.1	口径 9.5 残高 1.7	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ・ヘラ記号	密	良	灰7.5Y6/1	口縁部 11/12	ツマミ打ち 欠きか?	011-05
28	須恵器	円面 硯?	SH11014 上層	残高 4.1	内外面:ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	底部 1/12未満		011-01

第Ⅱ-3表 第189次調査 遺物観察表(1)

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎 土	焼 成	色調	残存度	備考	登録 番号
29	土師器	小型 杯?	SB11015 柱穴	口径 9.8 残高 1.4	内外面:ヨコナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12未満		011-04
30	土師器	壺?	SA9472 柱穴 掘形埋土	残長 3.4	外面:ハケ 内面:格子状刻み・漆塗布	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	—		012-04
31	土師器	鍋	SA11018 掘形埋土	口径 29.7 残高 5.5	外面:タテハケ・ヨコナデ 内面:ヨコハケ・ヘラケズリ・ ヨコナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12		008-04
32	土製品	不明	SA11018 柱穴	残長 5.3 幅 3.7 厚さ 1.4	内外面:ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	—	甕底部 か?	009-02
33	須恵器	杯G 蓋	包含層	口径 9.9 残高 1.9	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ・オサエ・ ナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	ツマミ以外 完形	ツマミ打ち 欠きか?	003-02
34	須恵器	杯G 蓋	包含層	口径 9.7 器高 2.8	外面:ロクロケズリ・ロクロナ デ・ツマミ貼付 内面:ロクロナデ・オサエ・ ナデ	密	良	灰10Y5/1	ほぼ完形		003-01
35	須恵器	小型 横瓶	包含層	残高 9.4	外面:ヘラケズリ・ハケ・ナデ 内面:ヘラケズリ・ナデ	密	良	灰黄2.5YR7/2	体部まわり 5/12		008-01
36	須恵器	杯B 蓋	包含層	残高 1.6	外面:ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5YR7/2	口縁部 1/12未満		011-06
37	須恵器	円面 硯?	包含層	残高 4.2	外面:ロクロナデ 内面:ロクロケズリ	密	良	灰黄2.5YR6/2	底部 1/12未満		011-02
38	土師器	壺?	包含層	残長 6.0	外面:ハケ 内面:格子状刻み・漆塗布	密	良	にぶい褐 7.5YR5/4	—		013- 01a
39	土師器	壺?	包含層	残長 5.3	外面:ナデ 内面:格子状刻み・漆塗布	密	良	にぶい褐 7.5YR5/4	—		013- 01b
40	土師器	杯B 蓋	包含層	残高 1.3	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	ツマミ ほぼ完形		003-07
41	土師器	杯G	包含層	口径 9.9 器高 3.7	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12未満		003-04
42	土師器	杯G	包含層	口径 9.4 器高 3.0	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12		001-02
43	土師器	把手付 鍋	包含層	口径 8.5 残高 5.5	外面:ハケ・ヨコナデ・把手貼 付・ナデ・オサエ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 4/12		011-03
44	土師器	甕	包含層	口径 19.9 残高 7.6	外面:タテハケ・ヨコナデ 内面:工具ナデ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12		001-04
45	土師器	鍋B	包含層	口径 20.3 残高 10.9	外面:タテハケ・ヨコナデ・把 手貼付 内面:ヨコハケ・オサエ・ヨコ ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 3/12		003-03
46	土師器	甕	包含層	残長 4.8	外面:ハケ・不明墨書 内面:ハケ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—	墨書あり	011-07
47	土師器	高杯	包含層	残高 4.9	外面:櫛描直線文・斜線文・ ミガキ 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	脚の 一部	3方透孔	002-01
48	土師器	杯A	包含層	口径 13.2 器高 3.3	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 6/12		001-01
49	土製品	杯A	包含層	口径 12.6 器高 3.2	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 3/12		003-05
50	土製品	杯A	包含層	口径 10.4 器高 2.6	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12		003-06
51	土師器	皿A	包含層	口径 14.9 器高 1.2	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 3/12		004-02
52	須恵器	蓋	包含層	口径 13.1 器高 1.9	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:鶯茶814 素地:黄灰 2.5Y6/1	底部1/12	自然釉	001-03
53	灰釉陶器	瓶	表土	口径 10.0 残高 3.2	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:鶯茶814 素地:灰黄 2.5Y6/2	口縁部 2/12		008-01
54	土製品	不明	包含層	残長 15.4 厚さ 2.7	上側面:ハケ 下面:ナデ・沈線	密	良	灰白2.5Y8/2	—		009-03
55	土製品	不明	包含層	残長 5.9 厚さ 1.8	上面:ハケ 下面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		009-01

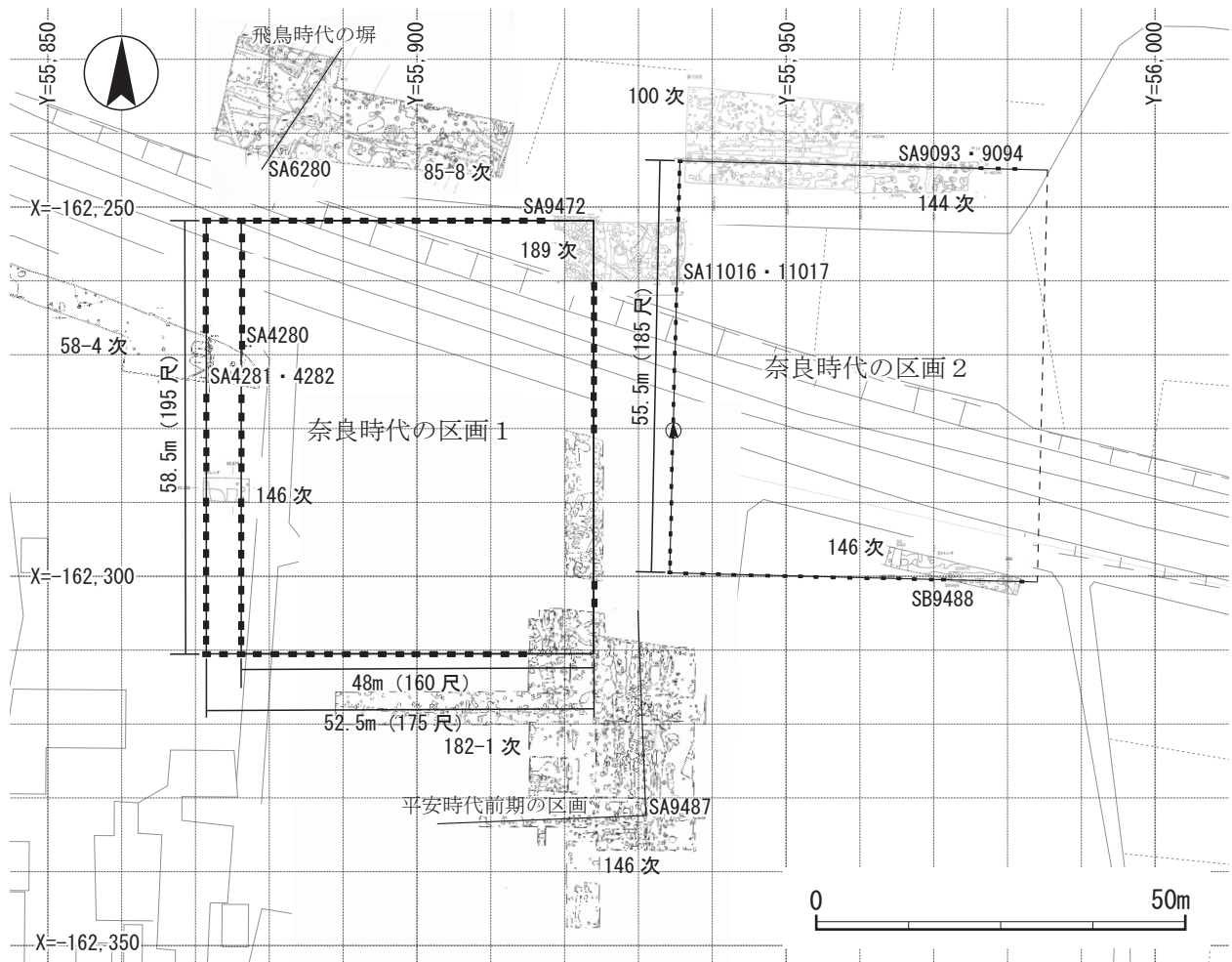
第Ⅱ-4表 第189次調査 遺物観察表(2)

11016・11017は西辺の可能性はある。仮に第146次調査東区のSB9488を南辺と仮定すると、南北55.5m(185尺)、東西48m(160尺)以上の規模が想定できる。また奈良時代の区画2は、複数の柱穴が重複しており、2～3度の建て替えが想定される。このことから、奈良時代にはSA9472を含めて、3～4度の区画変遷が想定でき、斎王の代替わりごとの区画変遷や、方形区画の時代別の盛衰など、今後より詳細に検証する必要があるだろう。

ただし、区画2に関しては、解明すべき課題点も多い。まず、区画2を構成すると推測できる北辺および西辺、南辺の柱列は認められたものの、区画の四隅がいずれも解明できていない。そのため、柱列が圍繞し、確実に区画を構成するとは現状では断定できない。また、区画2の時期決定については、方

位が正方位に近いことから、SA9472と同様の奈良時代と推測している。しかし、出土遺物は少なく、SA9472のような時期決定の根拠に乏しい。そのため、今後の調査の進展を待って、より具体的な区画の規模や次期決定などの検証を行うべきであろう。

- (1) 田中久生 2007「竪穴住居の分布から見た斎宮」『斎宮歴史博物館 研究紀要』十六 斎宮歴史博物館
- (2) 小田裕樹 2014「4土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所
- (3) 水橋公恵 2007「建物・塀の方位からみた奈良時代初期斎宮の変革 - 掘立柱塀SA9472の年代的な位置づけを中心に -」『斎宮歴史博物館 研究紀要』十六 斎宮歴史博物館



第Ⅱ - 11 図 中垣内地区における奈良時代の区画配置推定図 (1:1,000)



調査区全景（東から）



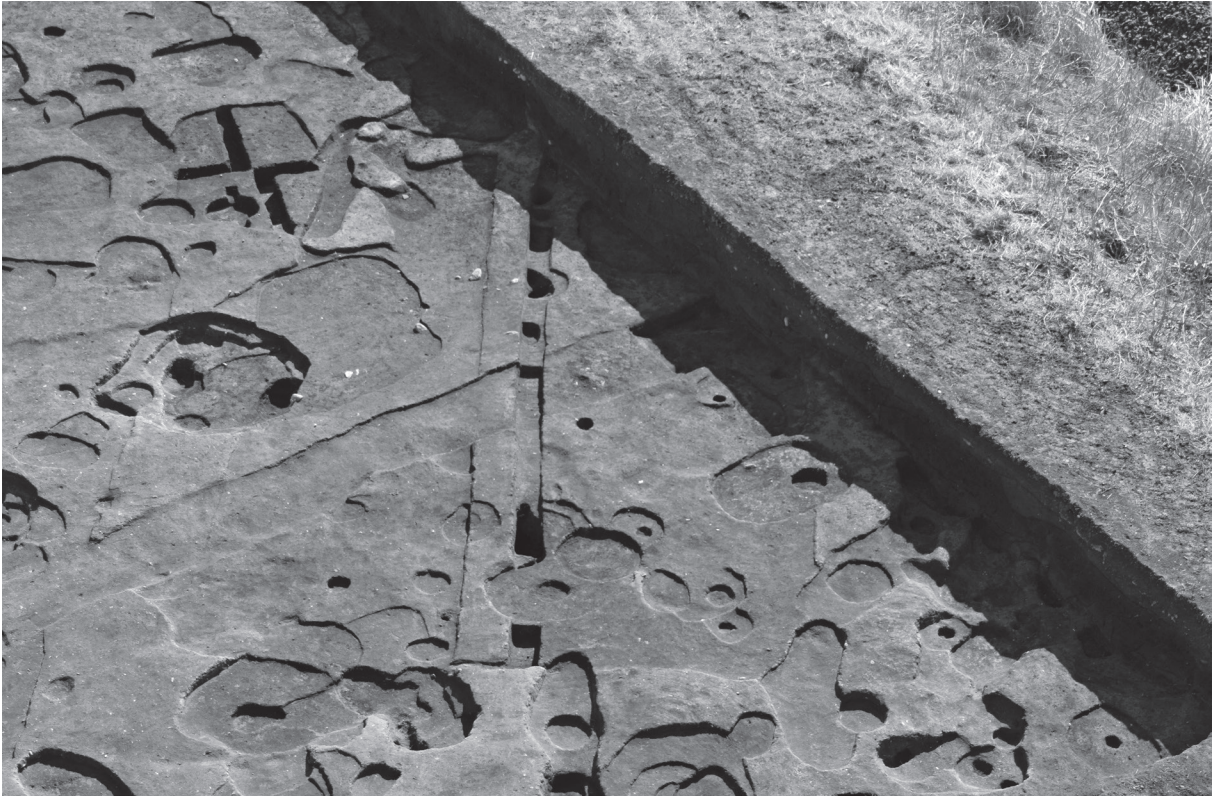
調査区全景（西から）



S K 11011 全景 (南東から)



S K 11011 内ピット出土状況 (東から)



SH 11014 全景（北西から）



SH 11013 全景（南東から）



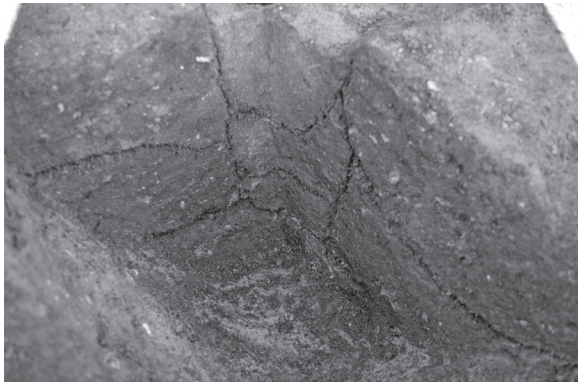
S A 9472 (北西から)



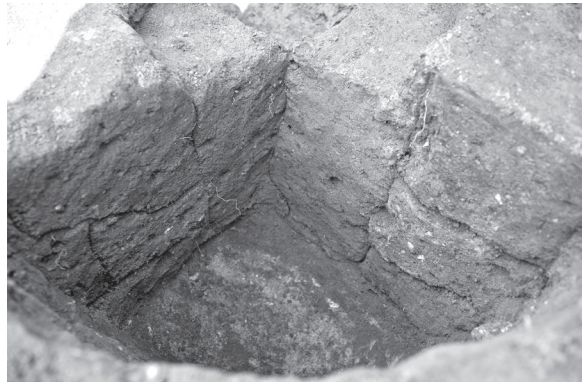
S A 9472 南北列 (北から)



S A 9472 東西列 (東から)



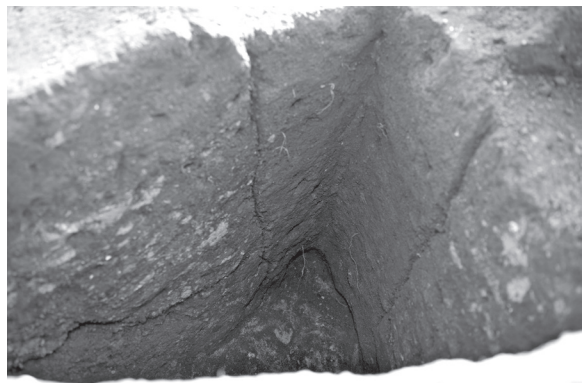
S A 9472 柱穴 1 土層断面 (南東から)



S A 9472 柱穴 3 土層断面 (南東から)



S A 9472 柱穴 3 土層断面 (北西から)



S A 9472 柱穴 5 土層断面 (北東から)



S A 11016 (北から)

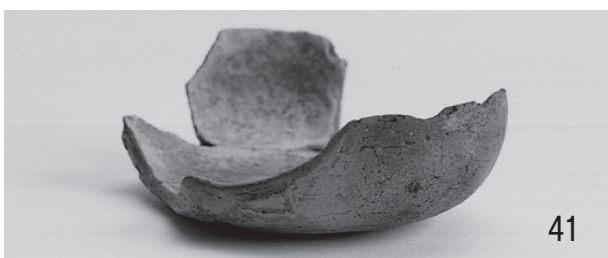
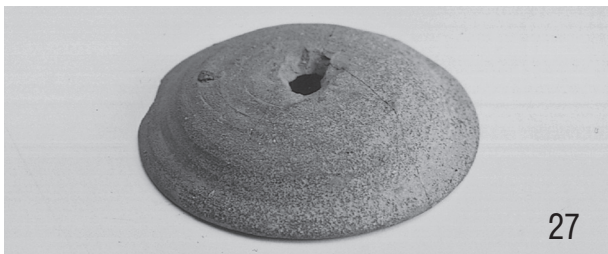
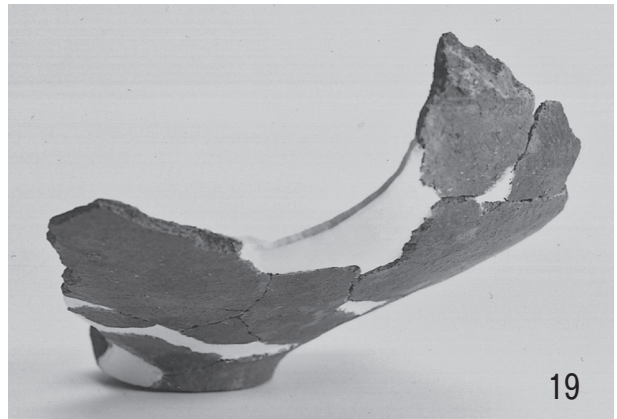


S A 11016 柱穴 5・6 土層断面 (西から)

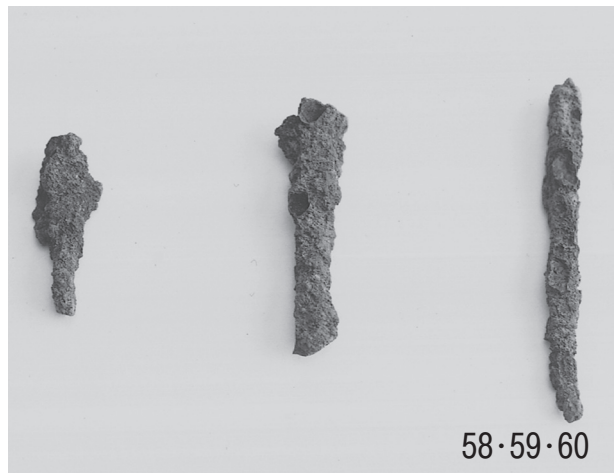
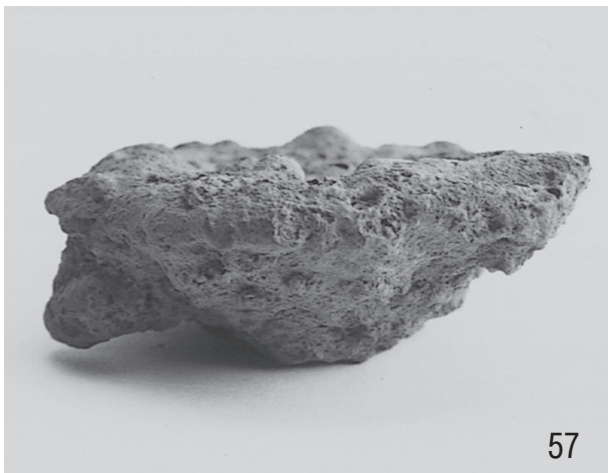
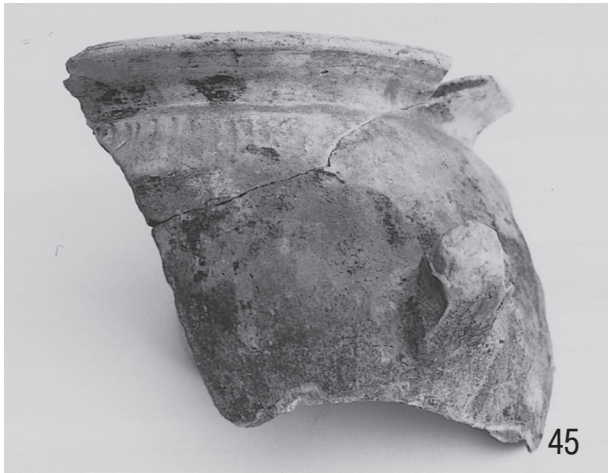
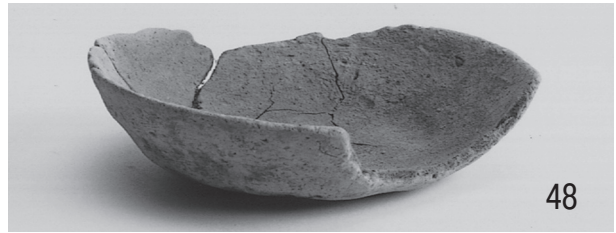


S A 11016 柱穴 7 土層断面 (西から)

写真図版 6 出土遺物 (1)



写真図版7 出土遺物(2)



報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせいにじゅうはちねんどはくつちようさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 平成28年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮原佑治							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2018年3月16日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′		m ²	
さいくうあと 斎宮跡	た きぐんめいわちよう 多気郡明和町 さいくう たけがわ 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20161217 ～ 20170324	127m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
斎宮跡 第189次	官 衙	弥生・飛鳥・ 奈良・平安		掘立柱塀・掘立 柱建物・竪穴建 物・土坑・溝		弥生土器・石器・ 土師器・須恵器・ 灰釉陶器・緑釉陶 器・山茶椀・白磁・ 青磁・土錘・石製 品・鉄製品・鉄滓		奈良時代の掘 立柱塀が方形 区画を構成す ることを確認 した。
要 約	<p>史跡斎宮跡でも飛鳥・奈良時代の分布密度の高い史跡西部中垣内地区の発掘調査。特に線路南側まで奈良時代の掘立柱塀が確認されているエリアの線路北側の調査で、塀区画の北東隅部を確認した。過去に確認した南東隅部と合わせて、奈良時代塀区画の南北規模が約58.5m（195尺）と確定した。また同じく、奈良時代と推測され、2時期以上に重複する掘立柱塀を調査区東部でも確認したため、時期を違えて、3区画以上の建て替えが、この地区で展開されていたと推測できる。その他、石鏃を内包した弥生土器壺が出土したピット、隣接する飛鳥時代の掘立柱塀と関連すると考えられる総柱建物1棟や竪穴建物2棟など、飛鳥時代の斎宮と関連する遺構も確認した。</p>							

史跡 齋宮跡

平成 28 年度

発掘調査概報

2018 年 3 月 16 日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 (有)ミフジ印刷
